



繪本忠臣藏
後六篇

中村進午文庫
文庫5
702
16



繪本忠臣藏

繪本忠臣藏後篇卷之六

目錄

- 堀井弥兵衛之像
- 堀井安兵衛之像
- 堀井父金武賭賞除蟻害。其二
烏山城中王地害人民圖
- 金武退治巨蟒圖。其二
- 堀井暗悟凶事報弥太郎仇。黑田權左門挑照女圖
- 權左門害弥太郎圖。堀井捕黑田圖
- 安兵衛寄食鳴瀨氏。松野新五右衛門落馬圖
- 松野強罵鳴瀨懸閤詳端圖
- 以上



繪本忠臣藏後篇卷之六

所屬 HBS
部門 IV
512 6



所屬 HBS
部門 IV
512 6
香號 6
小巻 6

昭和五年一月十日
中村奉天氏 贈

昭和三年十一月二十七日
法學部研究室より發管

堀井弥兵衛之像



おれもさし
老木もた
思ひも
若くはかろしく

あつね

○こゝろ井つはるゝ人墓あり
ふけしゝかろしく

堀井安兵衛之像



あつね
おれもさし
老木もた
思ひも
若くはかろしく

○こゝろ井つはるゝ人墓あり
ふけしゝかろしく



會本忠臣蔵後編巻之六

繪本忠臣蔵後篇卷之六

堀井伝

逸傳

保四郎金武賭賞除憐害

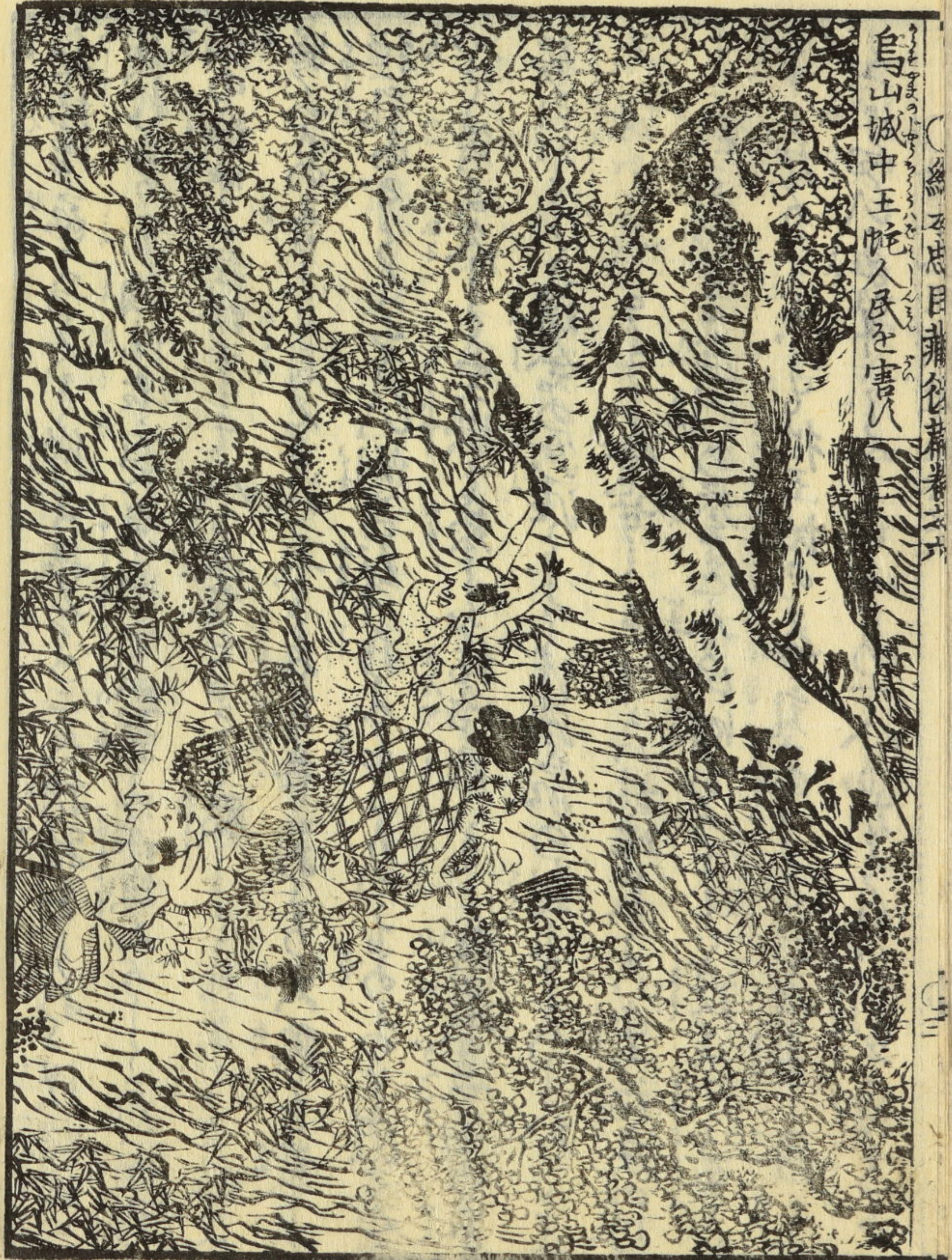
父金武のこころをわらひのり
か父金武のこころをわらひのり
か父金武のこころをわらひのり
か父金武のこころをわらひのり

傳は曰別毅本泊近仁は堀井氏の婿人苟仁は近仁けを
必天の恵をひく高き自ららり堀井金武下賤より
起つて頼の群士のよは抄人ら且は是も一ふるうなきて却
武庸がては勇義のよきはひく喜もあひあつて是すして又
人あり本泊して仁は別毅として義もあらんくうわむ
堀井伝 父を保四郎金武として性質別毅勇猛
のすししてよく武業は連傳して中づく槍術は妙きひる

初堀井家よりうへに終るは三人決着をせむは流槍絶の
足槍ありま須堀井家常州を怒言は石塚ありて同國鳥
山の城中は巨憐すして人を害するごと敷くたまへこれよ
通ふのよき一目のよき人よ忽其毒よあらう大懸を費し
狂気のぞくくく倒を或ハ我よあつものもあつるびを
つく終るよえく空塚と来く堀井家より武威最まの家
なればとく謙念のあはれして堀井家の村をうへかこよ
石塚ありて今昔して一は堀井家より東流度の内
より掘りぬる武門の参を今昔ありてはよき
まのなりとも彼土地の毒気甚しとて過易に推す
と地をいふ聲をいふ一人かたれば別を賤す下

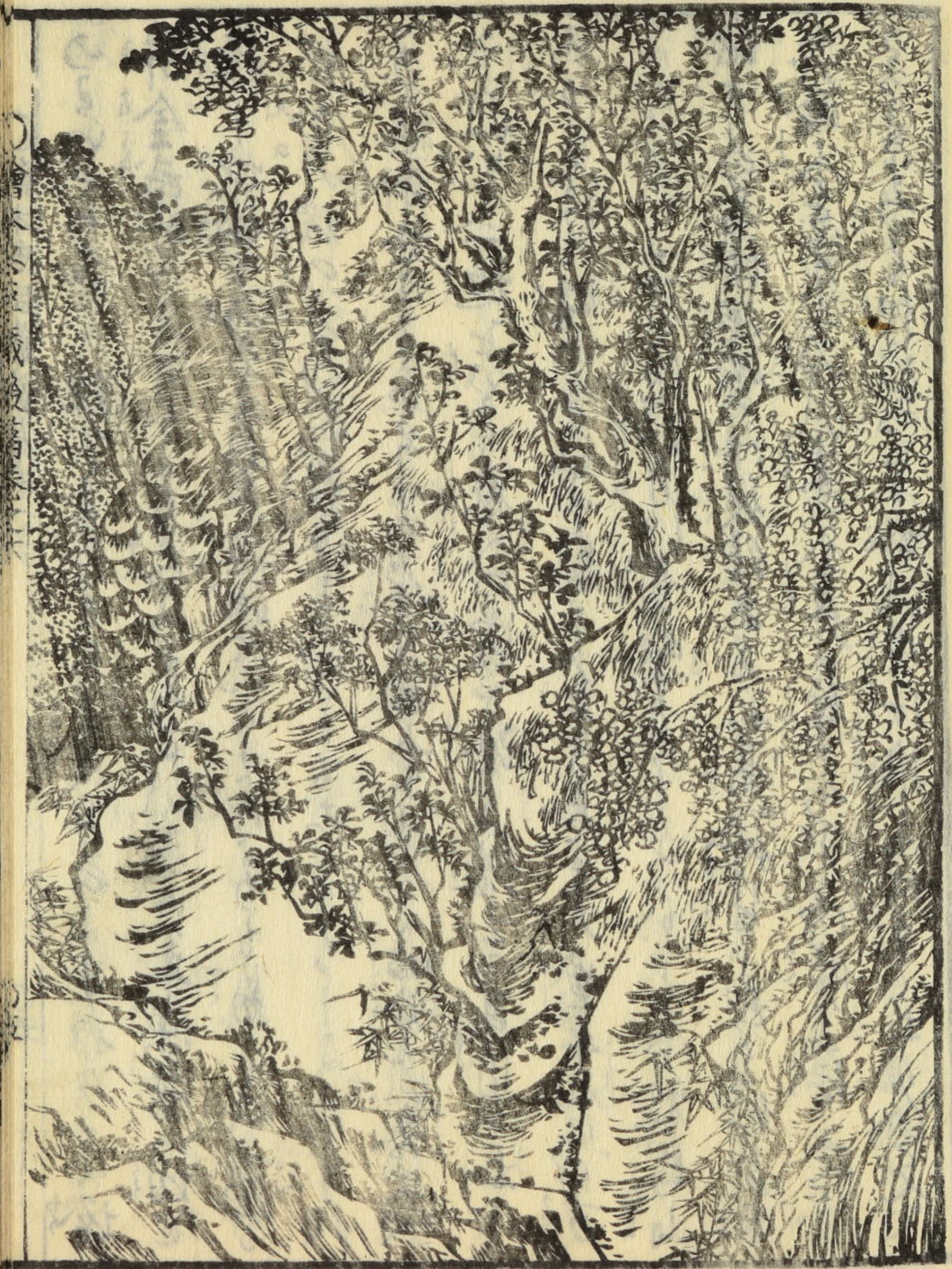


繪入史記後注用卷之六



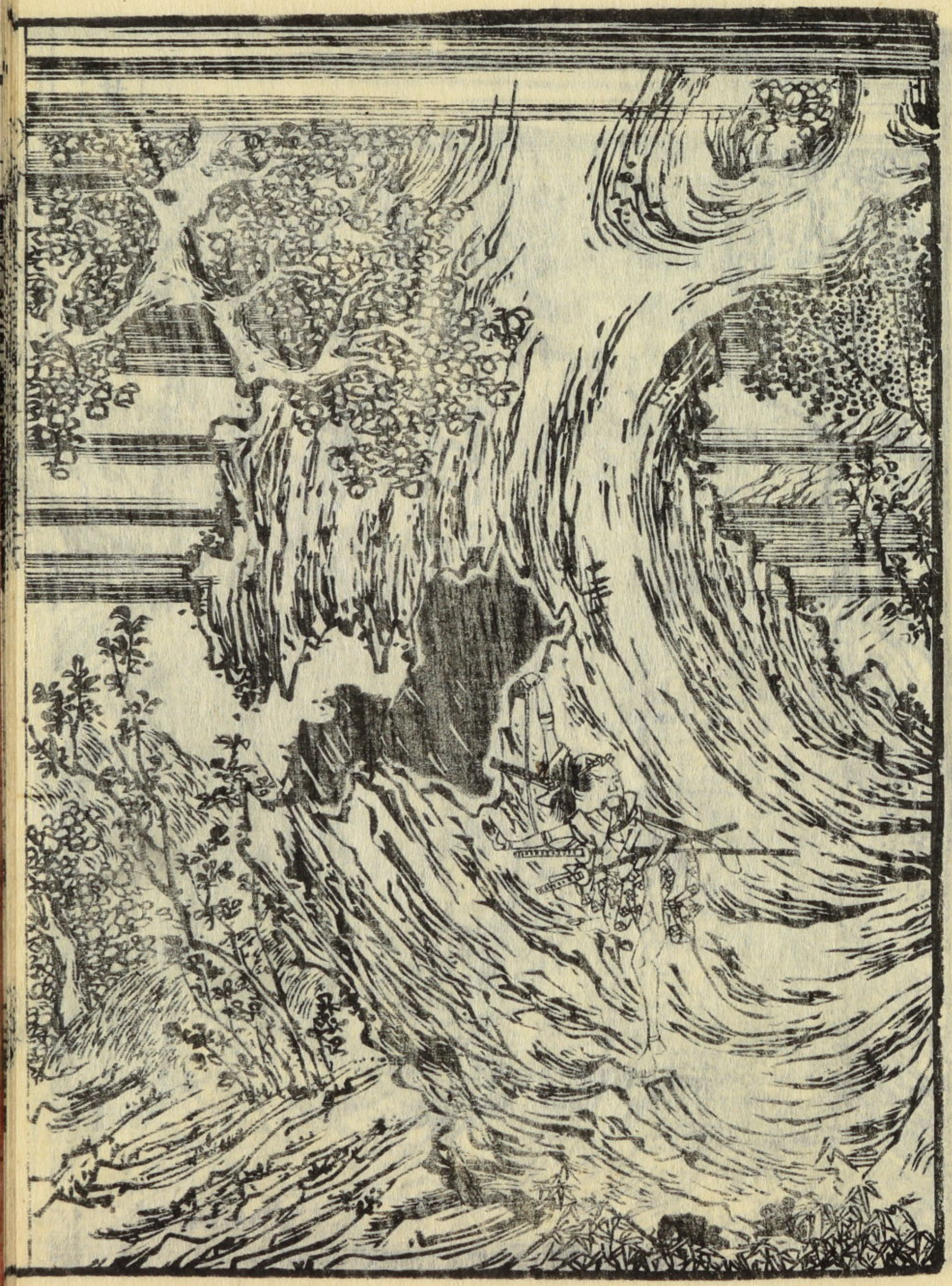
烏山城中王蛇人民を害す

繪入史記後注用卷之六

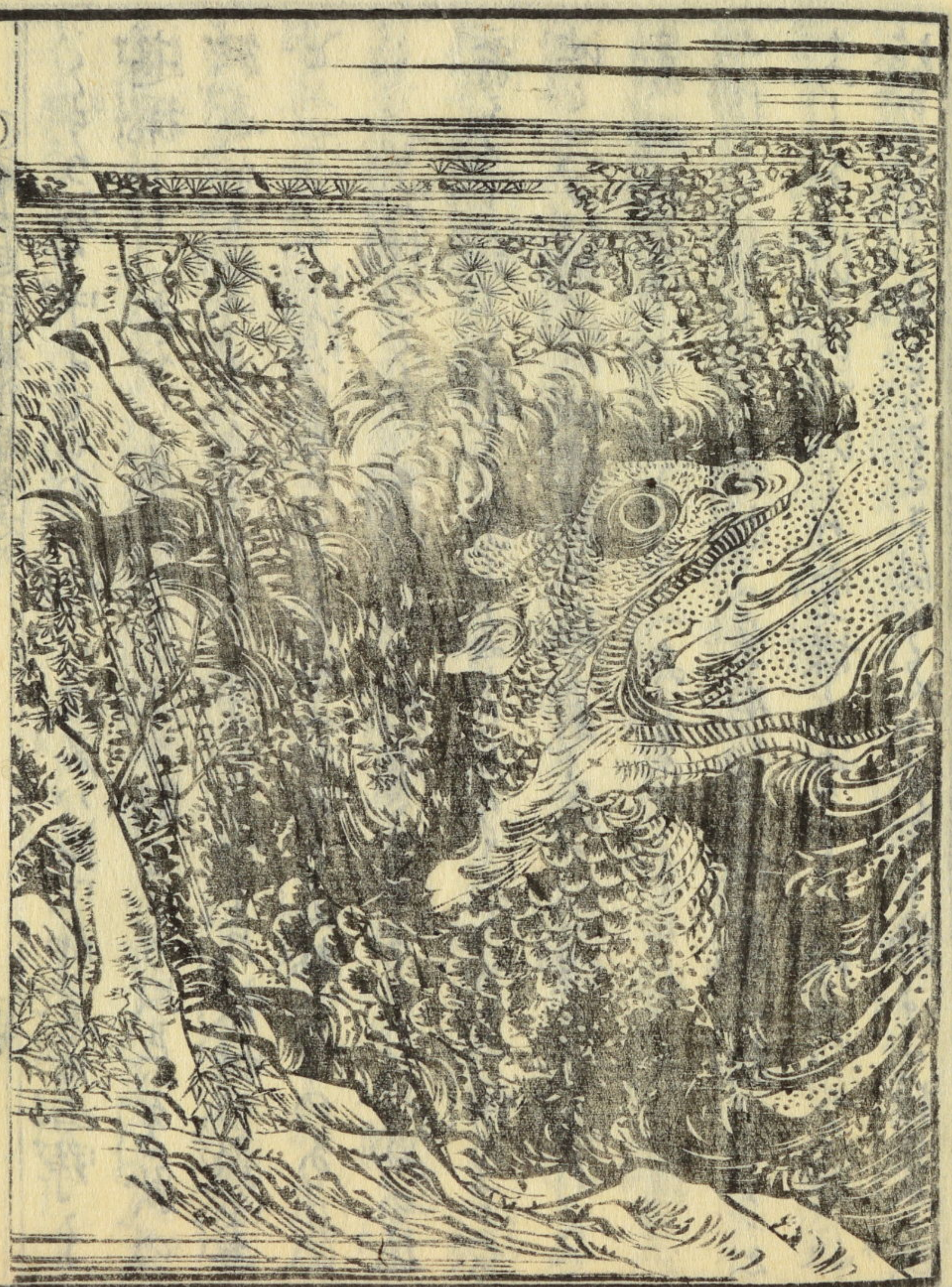


其二

○絲孝忠田補公似稿卷之六



堀井金武福を贈りし巨憐を返す人



其二

繪本忠臣藏後篇卷之六

ちまうが人もねえしの腰あつおろしあゆむかのさほくはさく
 打倒さく一眠ア一六坂井ハ改ま巴ヶ汁畧を圖をゆるり
 と膝も氣をすり灼ゆあは一陣の温風視し超りまゐるまや
 ろころりに帝腰が合ま武を中ら満分の筋骨ゆるく
 寝たびうぶさくさく覺るるもまや半一う程のさくは
 けりややく自憤励し一眠をいつせさるるに中へるるあ
 他見る黒暗くの中は二の所流くや二條の矢をひきや
 けし長軸も動くころりころりころりころりかたはにや
 かしころり一野杭をすさる一尺春をさまきものころり物を
 服せんころりのいさわひは合ま武よくすくこれハ同一に
 まるる巨憐の獲くころり支那のひうりたきもがころり長衣

のひさくころりまきとわりたりころりの合ま武方のも海をさくお
 のころり壯士何まの要もえや多年酒凍せし奇妙術も今
 け時あがくまきとさく五人の力を腕よくころりねひをさく
 火蓋を切るとあさきとびしころりがまの打板をりかころりの後
 ありころりも不意まきところり名をさくころりかころりころりころり
 さ山下ノ崖に落ちおろし一歩をむらりさくころりし脚杭
 おいおろしころりころりころり敬礼しころり通るころり合ま武ハハ
 まはころりころりころり用事のねめころりかころりころり飛おろし
 ころりわらう二丈よあまゆる巨憐の老西の痛もよか痛くはし
 いころりまきもころりころりあれの山も製ころりあれハ合ま武則勝る
 軍刀板ころり一箇首より合ま武ころり幾下ともあく腕をたれ

會大...
...
...

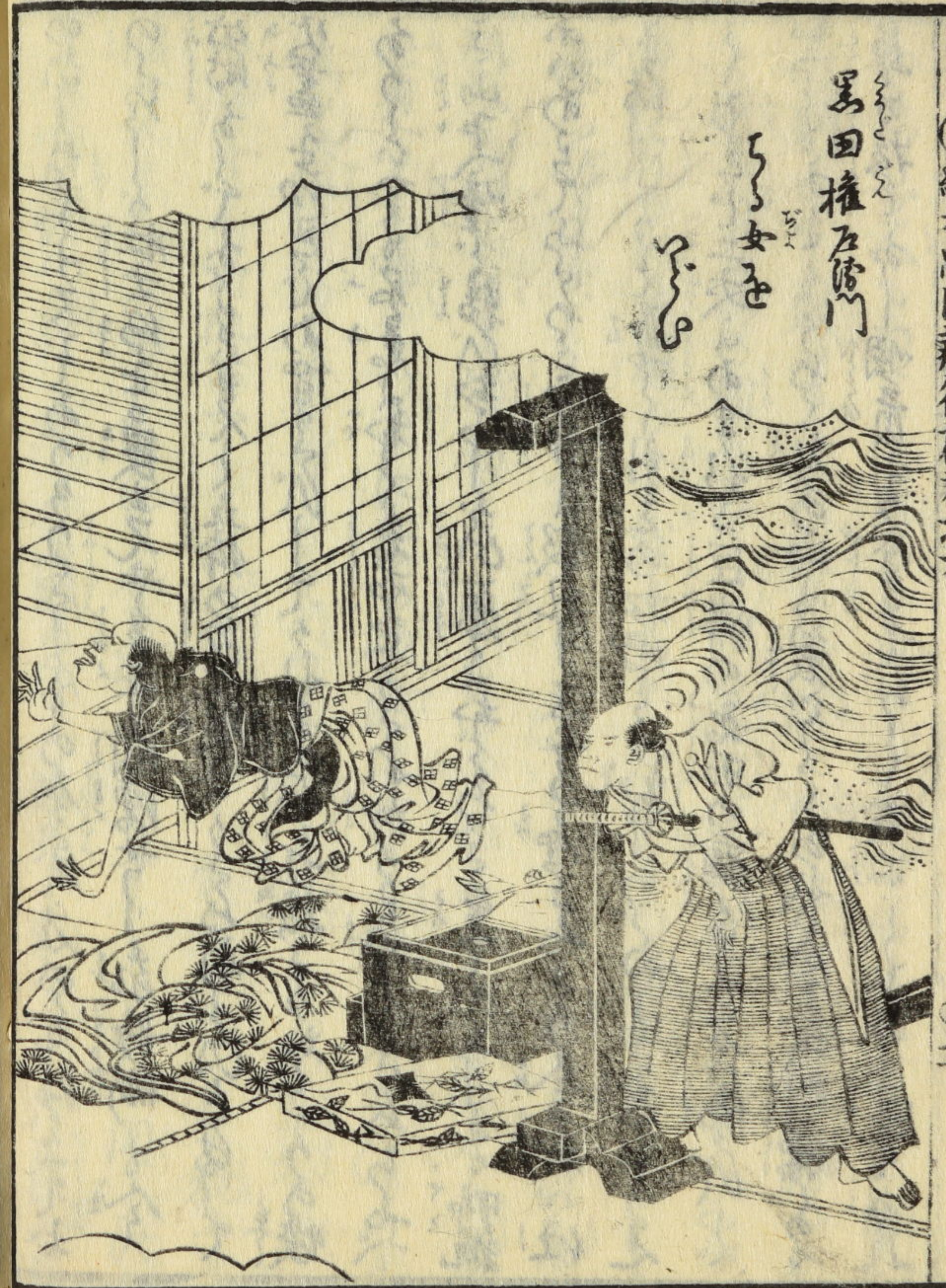


繪本忠臣蔵巻之六

黒田権五郎門

らゝ女子

...



と家おのりけらるるカ一〜おのりし〜
はまあるとあるあり〜殊外は〜
しつてある人の馬のおあるは〜
と解し〜これ同藩の諸士も〜
〜池のふらありけらるる〜
よりの武勇をのりし〜
と解をさる〜ちと入〜
死のすが〜人〜
勇猛の藩王があるま〜
のあり〜か〜奇特の〜
〜あり〜して〜

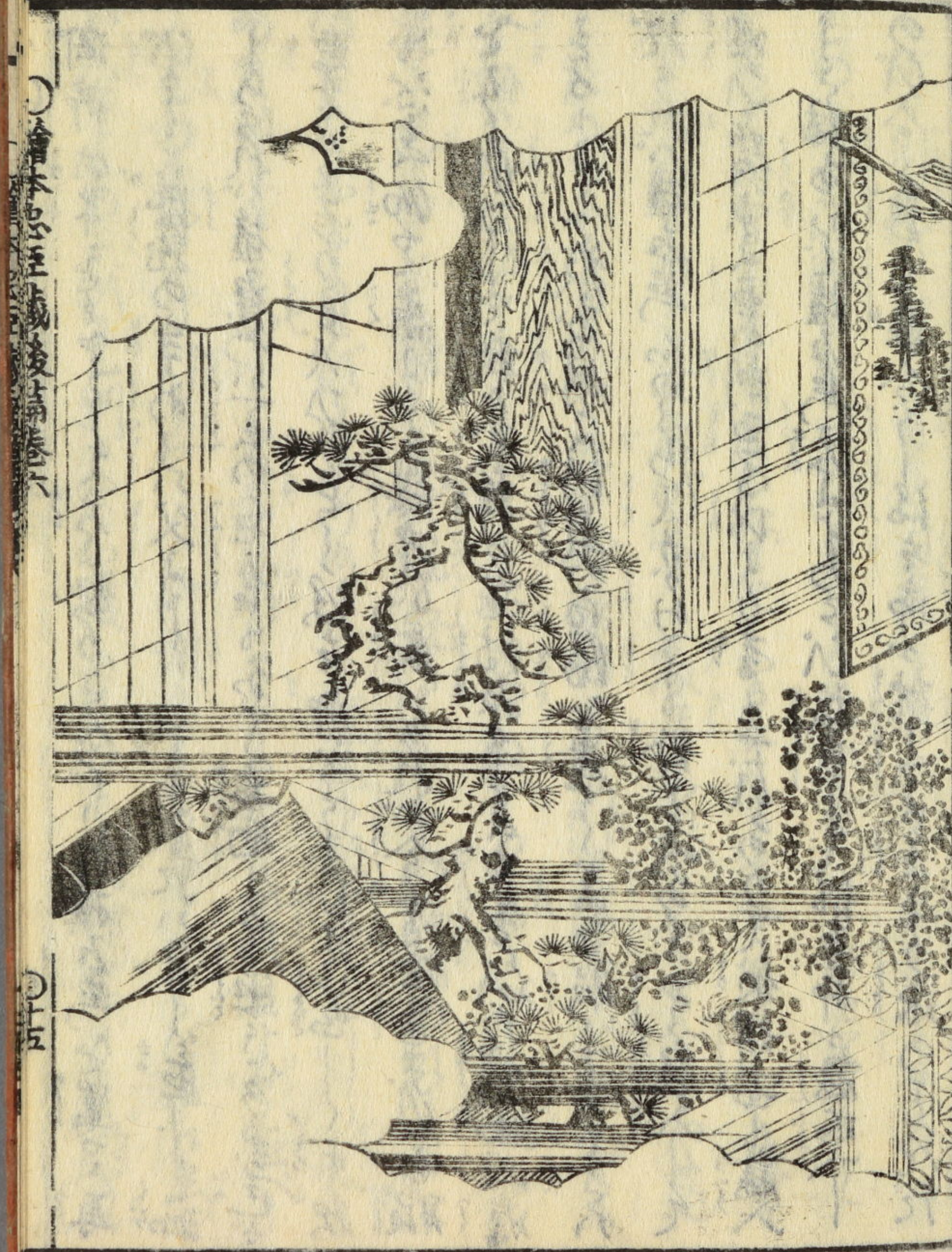
〜大星が方〜
ち守大は感称す〜
〜に自〜
〜長押〜
〜是〜
〜金武〜
〜使〜
〜金武〜
〜金武〜

申付は色けりて後金武以芽に秘切かゝるゝに二百石
加増ありて銀金三百石を以て願ひつゝりゆふ金武亦去乃
後嫡子治盛家傳お淡をさうて治盛治家又りて討封の
つゝ雲州赤尾へぞ移らるゝ

赤尾滅実諸悋函奉報嫡男治家御仇

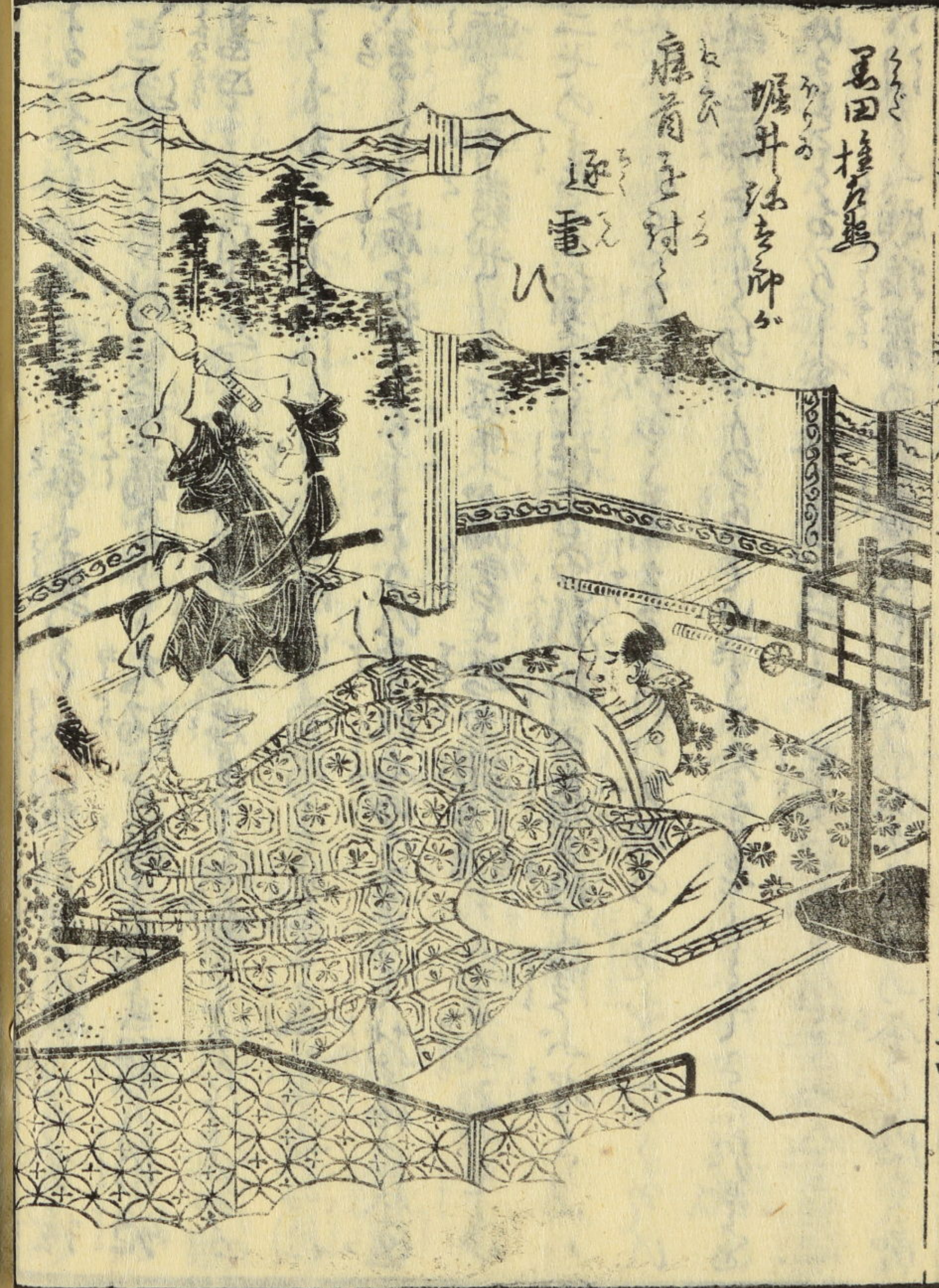
傳へ曰く孫傳へて父金武志を継ぐ其為人別毅す
博く武人あり弓矢の了り達軍學に暗くは討
に陰謀は妙きゆり時の士梅はゆるされり平生武を薄
として健くあり終末は古稀に跡を遺り性孝有馬の脚
をさけり初孫は赤尾の城井より去り番匠を勤りて
治盛の妹の事思因權を遺りしゆりのあり居人として乃

よるべあり伯父梅井より去りて食事あり教月之光陰
と送りたるが性價淫弱す大酒を好むも飲り以て
甚中うびとては梅井を思ひて敵くすたゝある
しもあらくは孫を以て謀中よりあつゝる勢甚禁むあはれ
はるゝ中を常に自らより治盛にゆりてお病の杖也
願ひ再發せり堀井源宗は照女後安藤いり女ありと事
二七の事をもむるは松吉の氣柳の眉霧は續ぶ有るなは
あつて中より又はあつて團名あれば父母の徳もたう事あり
彼是縁をさうむるの事なり人をもさうしてさうに事を
ゆるしてありて権を遺りつゝ照女におりてる人あり
ハハハハ顔良藉の振着なかりて照女の念見は師



○繪本忠臣蔵後巻第六

○十五



繪本忠臣蔵後巻第六

○十六

尾田 権左衛門

堀井 伝之助

麻呂 正対

通電

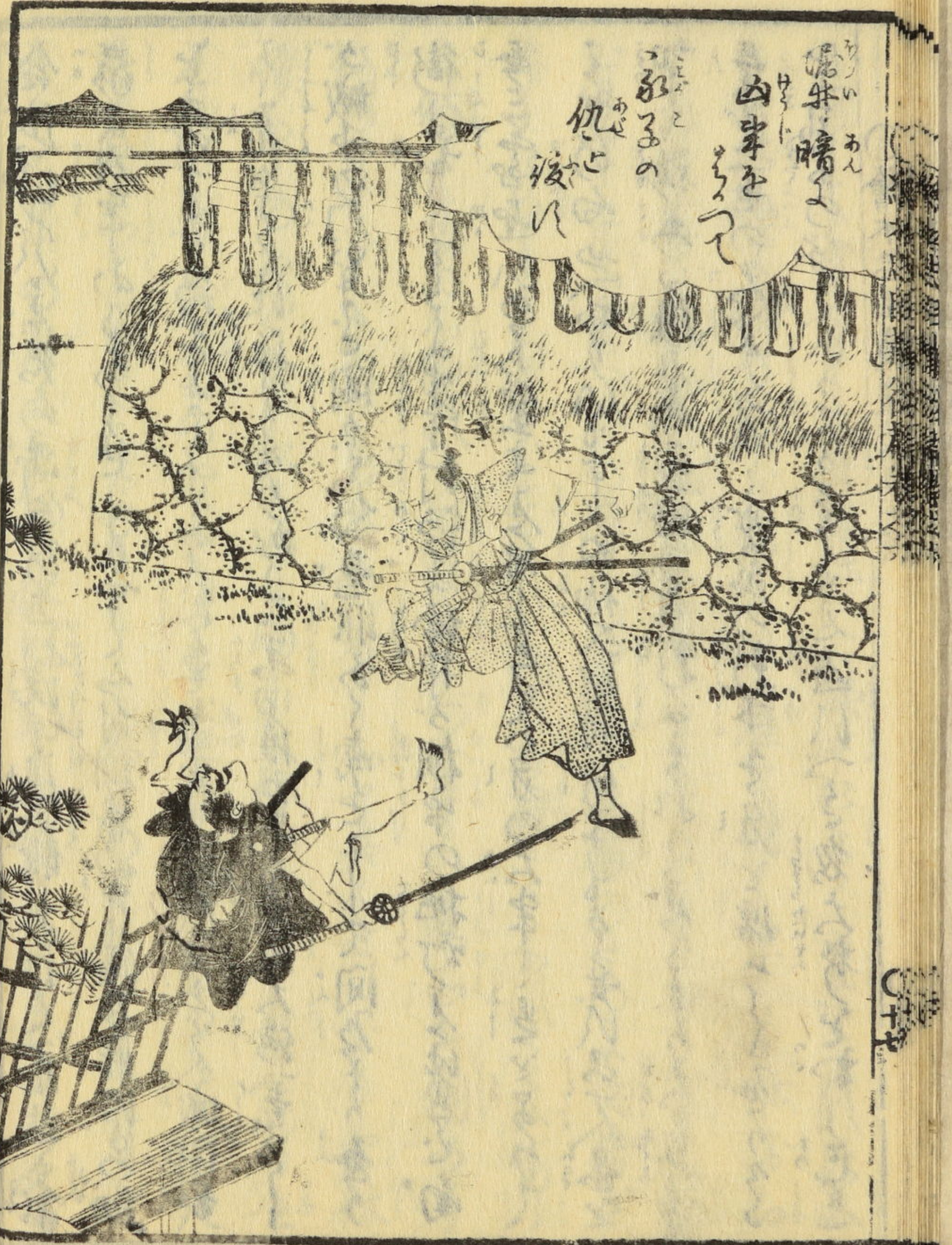
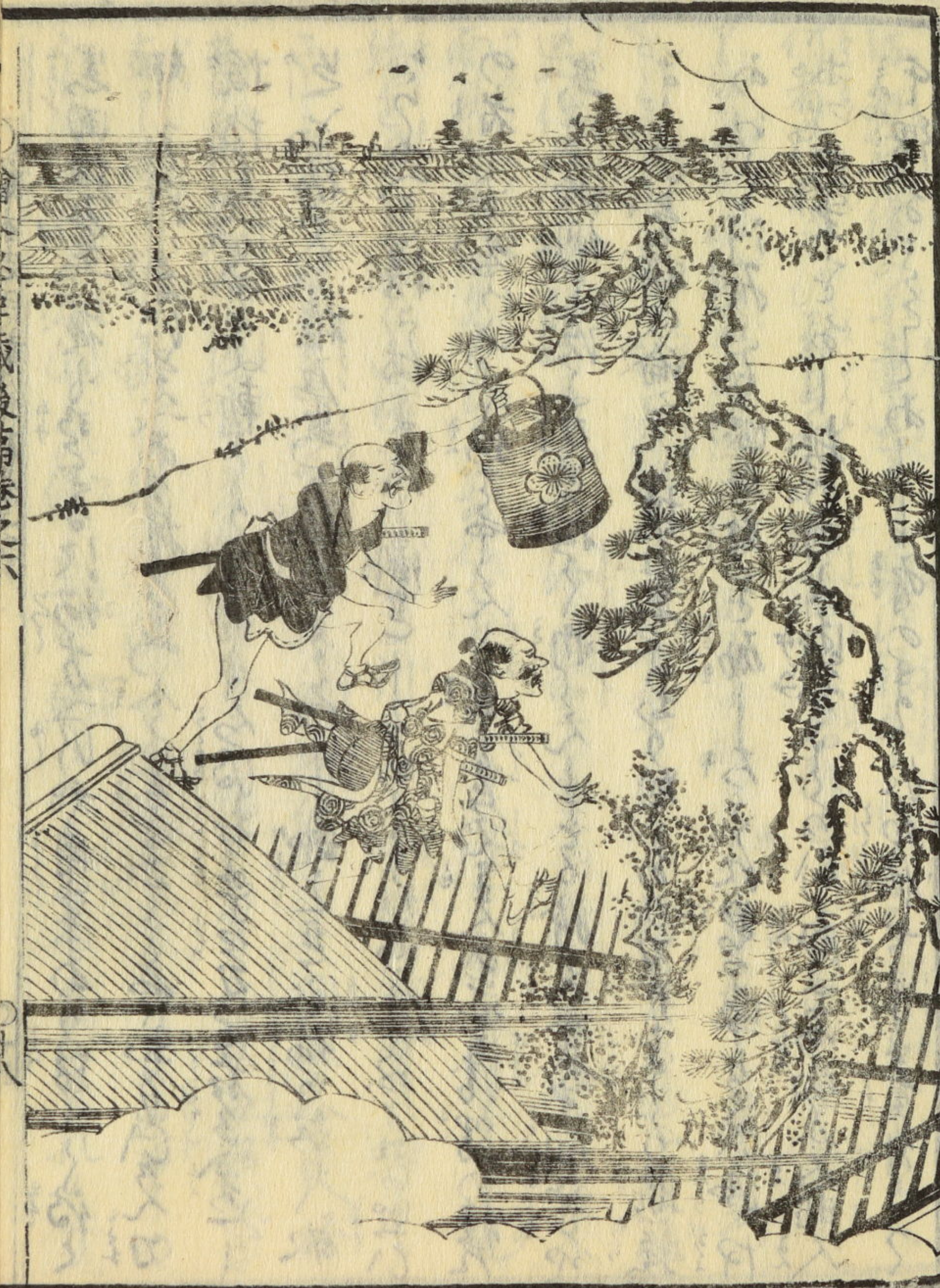
ハ

同所（同所）の事（事）を（を）て（て）大に怒りて人々に推す事と罵りて再（再）
びくも尾籠の事わくバ父よりくまきりハく（くまきり）と罵りて船（船）
しつれバ権左衛門ハ云の延喜もあく毒酒（毒酒）一を退（退）くたることば
西軍ハくさるる人ハくさるる海を舟とてしめて事（事）く（く）事（事）ね
もふまゝ酒を齎（齎）く（く）城中に病（病）々バ今昔とさるるハ水服
とてハバ（ハバ）一を相人辭（相人辭）を待たるるよりさきハの婢女（婢女）権左
衛門とて（とて）数及厨（数及厨）ハり或ハ白湯と煮く茶と服（服）く（く）とて
だまれば権左衛門ハいりてりかへとも珍（珍）とてあくや（や）床入（床入）て
烟ハあつた西の朝（朝）さるはよりさきもせハありて被婢女（被婢女）も床入
し（し）はあがく権左衛門大にさるるこび扱（扱）てし海を舟（舟）と麻（麻）西ハ
のび入（のび入）と敷く藤（藤）入（入）し海を舟（舟）と扱（扱）てさるるより氷の上（氷の上）にた

んびり扱（扱）あ（あ）く首を切（首を切）て再（再）ハ己が罪（罪）をへさるる用
意の袍（袍）を中脇（中脇）よか込（込）持（持）ちより思（思）ハ出門の言（言）扇（扇）を写（写）えし
とね（とね）て母（母）がさ（さ）く一（一）世（世）れたまていふ人ともさるるさるるあ（あ）く藤（藤）と
越（越）え人とおしども各思（各思）び（び）て一（一）夜（夜）重（重）あればやせんやせん
とたたらさるるや五更の野（野）のりたれば表堂下（表堂下）遊（遊）記（記）あ（あ）く
今朝（今朝）ハあ迎（迎）ひて付（付）く色（色）さるる初（初）のぬららまあ（ま）づ（づ）し（し）挑（挑）灯（灯）
持（持）くも各思（各思）て権左衛門ハ海（海）を舟（舟）とて水（水）汲（汲）桶（桶）の影（影）さ方と
ひさし思（思）さしせびよありたるる表堂下（表堂下）遊（遊）記（記）ハ思（思）てし（し）ハ門
の事（事）ハ（ハ）さ（さ）るる事（事）ハ（ハ）ね（ね）のね（ね）のね（ね）もあ（あ）く（く）ハ（ハ）候（候）立（立）てを（を）並（並）ハ
くさ（くさ）つ（つ）舟（舟）より（舟より）一（一）ト（ト）せ（せ）く（く）清（清）城（城）とてさるるハ（ハ）権（権）左（左）衛（衛）門
ハ大（大）にさるるハ（ハ）是（是）別（別）天（天）の加（加）護（護）あ（あ）ら（ら）し（し）門（門）押（押）写（写）し（し）と（と）藤（藤）と

（同所）の事（事）を（を）て（て）大に怒りて人々に推す事と罵りて再（再）

（同所）の事（事）を（を）て（て）大に怒りて人々に推す事と罵りて再（再）



山井 暗
凶岸を
うつて
おとこの
おとこの
仇と
後い

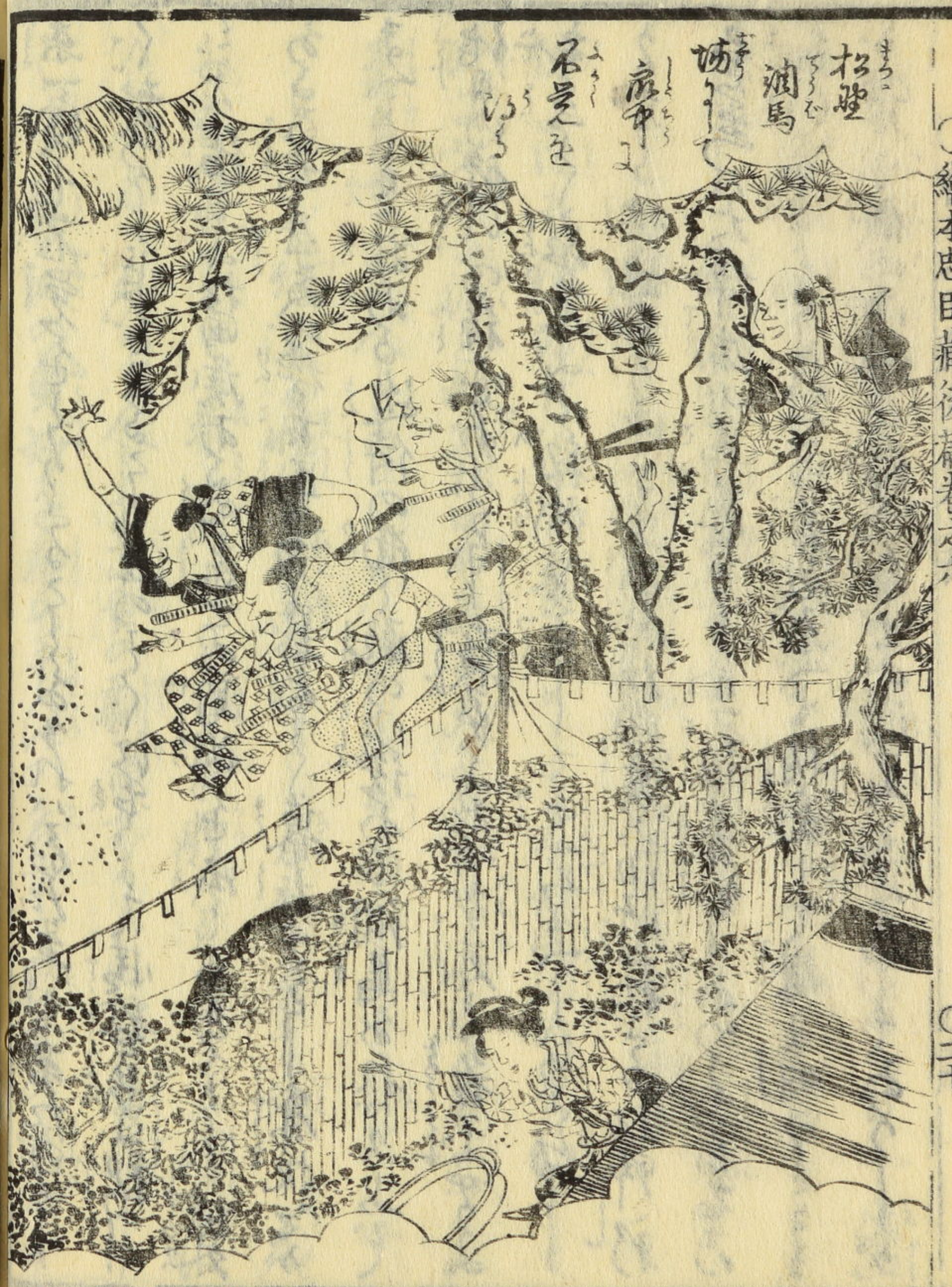
黒田権五郎 夜も明るに何方へも用事あり給へり
 知りしに先んてある権五郎 今いふ事にてとやありいふ刀
 扱持高文又斬くうる 堀井の打込方と右多(秀)一
 之と揚く 権五郎が脇後ととらへ 灘上目して何うなした
 たらあへば様はゆよ大い倒す一がかくらへしついで
 の者ども来りつゝ何ぞ申入しとまよふと主人の赤巻袴の権五
 郎と蹴倒し返り力と扱く物入んととら 袴は豊中同様に
 ままい是非の論あり 権五郎よりかきあり刀りさうり膝搦
 あげく 門指より堀井を励し ちうん怒りやうるハ汝何
 おの悪事とあり 杖の用よ逆おらうらいあよ及向ふ人罪人
 を留めんとしあへト有のまゝに白状せし責付らう

何処へ下僕の小童もも 徳次郎の孫氣をえん又パークるハ
 何者かおせび 若旦那の清麻呂(忍)の清貞を打くま
 且いふく 山内宅あるべしとあり 堀井 大い強類 権五郎
 とらつてし ねら付主親あり 名をうけく 勝負ありはははは
 此ははは 懐福のあまのい 汝が悪事 さまをいふ 汝が主人
 面赤ん 法人の見たら 一あれをまゝに 海傳の首よりいんと 提
 端をひくくく いはら下僕一せく 三徳をハ 平目いふく
 ここのかりぬ 早急進けら 海へなれ 別捨使く 一回久き天坊
 井が宅よ あり 徳半見 命おすく して 海を 舟を 駈け 左 ぬい
 ち 一 後 権五郎 と 揚ら び び 味 せ じ 西 軍 平 の
 ち 白 状 及 び 六 終 了 首 を 削 け 島 本 本 及 び け け け け

繪本忠臣蔵後篇卷之六



招燈
油馬
坊
石
石



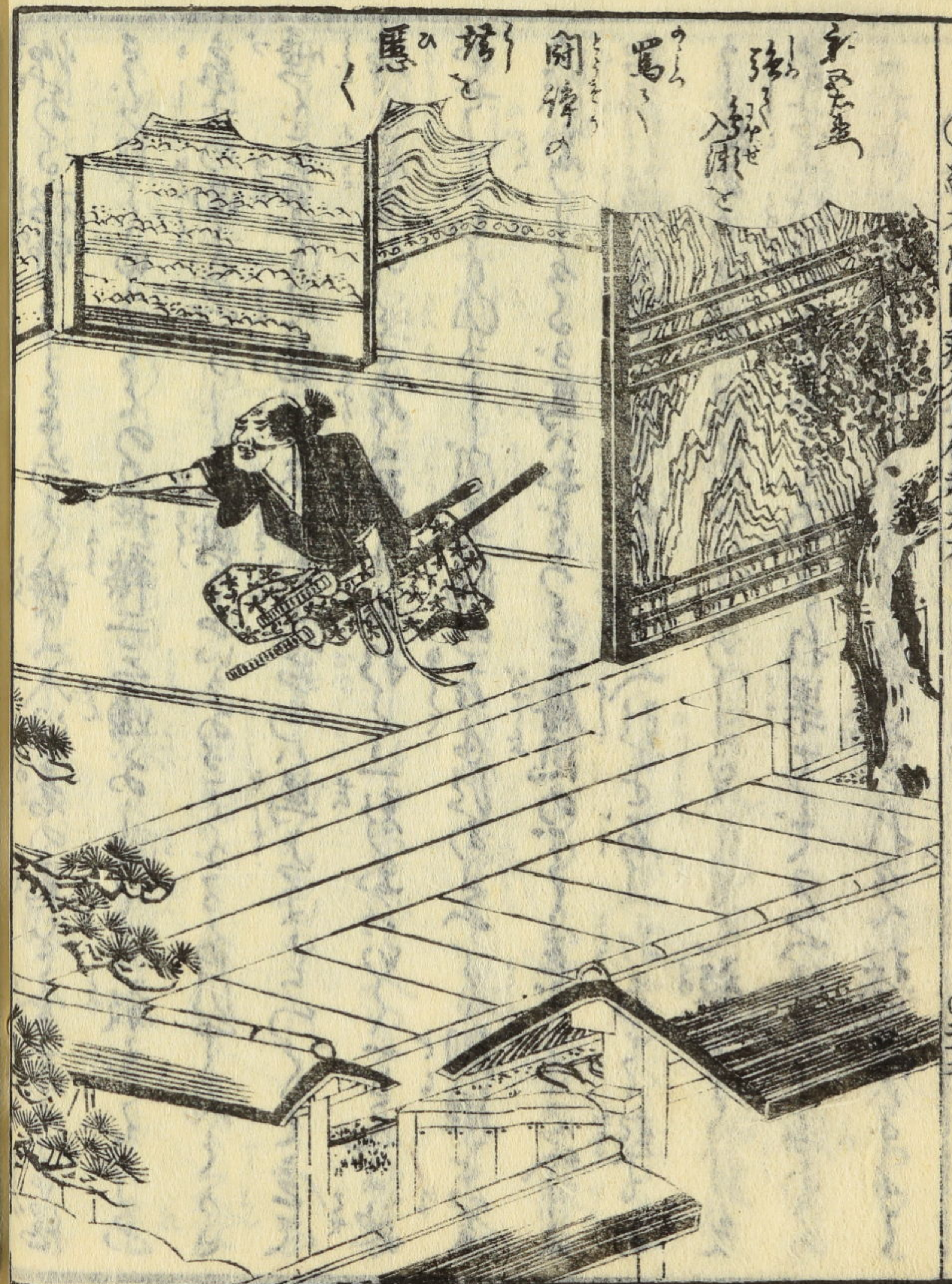
繪本忠臣蔵後篇卷之六

えより使をよく媚をよく 奸佞少兒性質あればかゝるちあこ
よも雜れたる秘曲とよまうとるのあはば一不教よも
無せしとてお士の目をもおぼろくせんものよし 則松田彦よ
りたるやうせよの曲馬とせむ早免女子のたらしむと
回復のこゝろくするもの秘曲とありしとよも或ハ支陣目
を引くお對一美幸儀つるもの秘曲とて廣野におくけ
一曲よめ一返原の眠とてほきしむるあんど又いへる西を
こらしよもあはび回今自家よ名を妙をいふられしとて
且バ返原といふは毎のこゝろの曲馬とすねびくはと後
よ備ふべしありしとて松田彦殊よ機嫌するよりく是
ハ通はかりしとてあるべしとてはうかまするべし

仰ある松野うとてまうとて婦よ入浴者の馬とてまき来るも松
まらぬくゆやまの地盤二三通ありとるが教をくらとら
家上の西よりうづりしとて無なるものさるあはしんくらと
睡をさきぐとあはしこのお彩おちつハ馬よとてつくとして
おの扇よひとてたよ教をくらとて一おあひく一人よ池
おせしがあひのひよとて馬場のたよはとて洞灘とて
くひおちくとも馬におぼろくと扇風のぞくまきとてとて
お野ははらとてとてあつとておとをたよとてあてて教よあ
くぬあつとてはらとてとてとてとてとてとてとてとて
おとよははらとてとてとてとてとてとてとてとてとて
よ松野がとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

（論）松田彦の秘曲とて

〇三三



新田 幸四郎
強 入道
寫 入道
岡 傳 之
悪 坊 之
く

何うらわりたるほどおぼすも一回も止然くは嫌うまうら
 降つまうら扱七松野新吾馬八存一とくふる不ぞんをさ
 くりとれた殿の口まのといひはあはる法士の面あはしく十か
 肩をひくくそ安うねさるてもいふあるのは業まそ
 八馬をおぼらませしやんと安うとを求めよの書のひび
 ハまふらうとやれやぬ毛の裏あはればおの思をなつ武士あは
 足常の勝負はあはしくあはれ何のこち取あつてくかるは縁ハ
 及ひるやして大い怒り直しは敵を毛いり安内もあ
 け手をて怒怒と敷くくえんぐく旬りたるや敵ハ一
 何の趣きといふてをまなれはまがく静やうくそ次と
 かくもくしあがらるるを新も馬ハ泳いり怒きを

志いびくハまさしくいふにやけるはくけくえんや今も法
 士酒馬の上腕の御某はよまおえんともおろく酒漉とく
 馬んもどらうを某きくは馬あししる糸を願寺怪の
 あり遠恨あつての半あはれハ某が死をそねり恥辱を
 のこく不興を敷くくえんもたたくある何れもせよけ
 かまてハ某武士道とせらりいざ今もくたあは後負
 せよし改め扱んと勢あはれは敵大よあはれをいひ方に
 ねせしあはれはくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちまきしむらじくくくくくくくくくくくくくくくく
 くるりまがくくくくくくくくくくくくくくくくく
 こねまきくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くるりまがくくくくくくくくくくくくくくくくく
 こねまきくくくくくくくくくくくくくくくくく

洞壘をくえくして誤る石のくいにり居せし
てや馬のねらふこと久しきあはれしつらなる重たし
まぐいんともすべしとておくのひきとて松野よつげさ
まぐいんともすべしとておくのひきとて松野よつげさ
よけいへくあをく怒り自の是れは勝負を改せんといひ
あがる松野が吃相あはれ馬もけいこをせしむる改め
えんしせしころもすくくをきせしむる改め
くし私の遺恨をゆくはよし命を果さんとして先づ
ありしあをも再とあらん流るる都て腫病のあはれ
第この止ししごとく物に郵中よて人の務もたうこ
あはれしや長谷守の門あらう因縁の地すく
の坊にあれば彼もたれく勝負と改し
もつひかたあればたれく勝負と改し
りしけ彩雲の馬場をいひはる守の陣地をいひ
難後邪智として表裏をく極むるも其のまは
あはれが武業よりく中へ及ぶるあはれ
郵中よてのころあはれは早業人またし
あはれくくもあはれは早業人またし
人ばあはれくくもあはれは早業人またし

の坊にあれば彼もたれく勝負と改し
もつひかたあればたれく勝負と改し
りしけ彩雲の馬場をいひはる守の陣地をいひ
難後邪智として表裏をく極むるも其のまは
あはれが武業よりく中へ及ぶるあはれ
郵中よてのころあはれは早業人またし
あはれくくもあはれは早業人またし
人ばあはれくくもあはれは早業人またし

後中右に飛後書一六

